

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580012

研究課題名(和文) 東北被災地域における心霊体験の語りと宗教者による対応に関する宗教学的的研究

研究課題名(英文) Tales about ghost and their treatment by religious specialists in Tohoku disaster area

研究代表者

高橋 原 (Takahashi, Hara)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：30451777

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災の被災地において、大量死に直面し悲嘆を抱える人々は様々な形で死者の霊の表象と向き合っており、それが「心霊体験」として表現されたときに、宗教者は地域文化や各宗派の伝統を参照しながら臨機応変に対応していることが明らかになった。本研究ではその対応の特徴として、(1)受容と傾聴、(2)儀礼の提供、(3)倫理的教育、(4)自己解決(自然治癒)の了解、という諸点を指摘したが、これは、さまざまな支援者が存在する中で、宗教者が担い得る「心のケア」の特質を考える時に貴重な示唆を与えるものである。

研究成果の概要(英文)：In the disaster area of the Great East Japan Earthquake and tsunami in 2011, bereaved people have various representations of the dead, which are sometimes expressed as ghost phenomena. Religious specialists, such as Buddhist priests, treat them, referring to the context of local religious custom or tradition of the sect they belong to. According to our survey, four common characteristics of how priests treat their clients can be pointed out: (1) Acceptance and listening, (2) Performing rituals, (3) Providing moral instruction, and (4) Promoting self-care for the afflicted. These could be important lessons when considering the nature of "kokoro no kea" by religious specialists among different professionals.

研究分野：宗教学

キーワード：心霊現象 東日本大震災 宗教者 こころのケア

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災の被災地において「お化けや幽霊が見える」という悩みが多く、僧侶達は対応に苦慮しながらも供養の儀礼によって応じているという報道がなされてきた。このような「心霊体験」の語りは通俗的な怪談噺として受け取られがちで、学術的な研究の対象となつてこなかった。

被災地の精神科医による、幽霊体験談の半数近くは怪談の類いではなく、むしろ死別した肉親が身近に感じられるというような、不安や悲嘆を軽減するタイプのものであるという証言があった。また、NHK「クローズアップ現代」で特集された、亡くなった近親者などが死の直前に現われる「お迎え現象」の研究も注目を集めた。「現代の看取りにおけるお迎え 体験の語り」(諸岡了介・相澤出・田代志門・岡部健、2008)は、「お迎え」が単なる「幻覚」ではなく終末期患者の不安を和らげる自然なプロセスの一部である可能性を示唆するものであった。

研究代表者は、こころのケアを提供する宗教的専門職(臨床宗教師)の育成に関わる中で、被災地における宗教的ケアのあり方の研究に着手していた。「幽霊」がPTSDのような心理学的反応であるにせよ、それが体験者の宗教的・民俗的世界観に相応しい語彙によって表現され、宗教者によって対応されるべきものだと考えられていることから、宗教者に向けられた「心霊体験」の語り、そして、それを受けとめる宗教者の対応の仕方を、大量死を経験した地域において宗教文化の文脈に配慮しながら行われるグリーフケアのあり方を考えるヒントになるとも考えられた。

2. 研究の目的

宮城県の被災地を中心に、幽霊体験談と宗教者の対応についての個別事例を蓄積し、その分析を行なうことを第一の目的とした。その際に、宗教者に向かって表出される「心霊体験」の語りの内容が通俗的怪談噺の域を出ないものなのかどうか、悲嘆を軽減するようなタイプ体験談がどれほどの割合を占めるのか、そして宗教者がどのようにそれに対応しているのか、宗教・宗派による対応の仕方には違いがあるのか、等を明らかにすることを目指した。

これによって、表に出てきにくい被災者の宗教的ニーズの一面を明らかにし、東北地方における死者表象や宗教的世界観の現代的様態と宗教者が果たしている役割に新たな光を当てることが期待された。

3. 研究の方法

(1)質問紙調査

宮城県内全域の宗教者を対象として郵送による質問紙調査を行った。配布地域を限定しなかったのは、本研究が念頭に置いている津波被災地の範囲を特定するのが困難であ

るということに加えて、被災地外からボランティア等で沿岸部の被災地を訪れている宗教者が多数存在するためである。

調査票の配布は宗教施設を単位として郵送によって行なった。仏教系の宗教施設には、宮城県宗教法人名簿に記載の住所をもとに配布対象を決定した。キリスト教系の宗教施設には、仙台キリスト教連合に關係する諸施設を郵送対象とした。神道系の施設は、複数施設を兼務している神職が多いために、宮城県神社庁の協力によって県内神職名簿に記載されている神職個人を郵送対象とした。

質問紙の内容は、回答者の属性のほか、「心霊現象」の体験者との接触の有無、「霊」に関する相談が寄せられた時の対応方法、この問題に対する所属宗派の見解と、個人としての見解、等を尋ねるものであった。

(3)質問紙調査2

宮城県内の複数の仮設住宅の住民を対象に、故人との「こころの絆」をどのように保っているのか、宗教行動や信仰の内容とともに尋ねる調査を行った。仮設住宅の自治会長による承諾を得て、個別訪問を行ない、あらかじめ用意した質問紙をもとに半構造化面接の形で行なった。

(3)インタビュー調査1

宮城県内の質問紙調査への回答者を中心に、期間全体を通じて随時、実際に「心霊現象」に関する相談に応じた経験のある宗教者に対するインタビュー調査を行った。一件あたり2時間ほどの非構造化面接であり、回答者の宗教的経歴とともに質問紙への回答の詳細、宗教的儀礼の提供方法などを尋ねた。

(4)インタビュー調査2

東京近郊の仏教僧侶および信仰者(特定宗教の信者に限定しない)を対象に被災地での霊的体験についての見解を聞き取りによって調査した。調査対象は主として縁故法によって決定した。非構造化面接であり、回答者の被災地での支援活動、宗教的ニーズの表出のされ方、「霊」への個人的見解等を尋ねた。

4. 研究成果

2013年夏に実施された宮城県内の宗教者に対する質問紙調査は郵送数1427件に対して273件の回答を得た。「心霊現象」に関する相談を受けることがあるという回答は111件、震災後に「心霊現象」等を体験したという人と接触したことがあるという回答は69件であった。

質問紙調査及び研究期間全体を通じて実施された対面調査から、宮城県内の宗教者が実際に「心霊現象」の相談に応じていることが示された。その対応の仕方について、浄土真宗系の宗教者には心霊現象を否定する回答が顕著であったが、むしろ宗教宗派を問わず、特に「公式見解」があるわけではなく、各人が個別の判断による対応しているという実情があきらかになった。おおまかに言えば、まず話を聞いた上で、各人の判断により、

読経、供養、祈祷、お祓い、祈りといった、ふだんから行なっている宗教儀礼を応用して対応していると言える。

対応の特徴を一般的にまとめると、(1)受容と傾聴、(2)儀礼の実施、(3)倫理的教育、(4)自己解決(自然治癒)の了解、という五項目が指摘できる。

また、実際にこの種の相談に応じている宗教者ほど、儀礼の有効性を経験的に感じている傾向がうかがわれた。

この種の相談が増加したのは震災後半年～一年を経てからであるという回答が散見され、これは、「心のケア」が、震災からの復興支援の中心となるのは概ね震災後三ヶ月以降であるという通説と符合するものである。

仮設住宅住民を対象として、故人との「心の絆」を中心に尋ねる聞き取り調査は2014年夏に実施され、100件の回答を得た。宗教者に悩みを相談したいというニーズはあまり見られなかった(三割程度)が、「身内の霊」(親しい死者)と日常的に向き合っている人が多く、位牌、仏壇等の宗教的資源よりも思い出や写真が心の絆を支えるものとなっていることが示された。

東京近郊の仏教僧侶および信仰者を対象に被災地での霊的体験についての見解を尋ねる聞き取りは2015年夏に実施された。この結果、被災地外から訪れた宗教者の方が霊的相談をしやすいという住民側の事情、霊への関心は薄い、被災者により添おうとする宗教者の姿勢が明らかになった。また、霊的信仰を持つ信仰者(仏教僧侶以外)には、震災と被災者の救済を霊的に意味付けて理解する傾向がみられた。

以上から、大量死に直面し悲嘆を抱える人々が様々な形で死者の霊の表象と向き合っていることが明らかとなり、その表現としての「心霊現象」は、必ずしも特定の宗教的信仰と結びつかない場合もあるが、宗教者による「心のケア」の手がかりの一つとなっていることが示された。

本研究に対しては、アカデミックな領域以外にもマスメディア等の関心も高く、NHKテレビをはじめ、主要な新聞等の取材をたびたび受け、その成果を一般に広く発信することができた。また、国際学会での発表、英語論文の公刊(高橋原“Ghost of tsunami dead and kokoro no kea in Japan's religious landscape”, Journal of Religion in Japan, 2016、予定)など、海外に対しても成果をアピールすることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

鈴木 岩弓、被災地における「祈りの場」の誕生-宮城県名取市閑上地区の日和山-、現代

宗教 2015、査読無、現代宗教 2015、2015、153-177

堀江 宗正、霊といのち 現代日本仏教における霊魂観と生命主義、死生学・応用倫理研究、査読無、2015、pp. 195-235

鈴木 岩弓、震災被災地における怪異の場、口承文芸研究、査読無、38、2015、pp. 28-41

高橋 原、誰が話を聴くのか? 被災地における霊の話と宗教者、死生学年報 2014、査読無、死生学年報 2014、2014、pp. 237-254

堀江 宗正、日本人の死生観をどうとらえるか 量的調査を踏まえて、東京大学学術機関リポジトリ、査読無、2014、pp. 1-12

高橋 原、臨床宗教師の可能性 被災地における心霊現象の問題をめぐって、現代宗教 2013、査読無、現代宗教 2013、2013、pp. 188-208

[学会発表](計 13件)

鈴木 岩弓、被災地における死者の記憶、日本宗教学会第 74 回学術大会、創価大学、2015年9月5日

高橋 原、死者の記憶と向き合う人々と宗教者の対応について、日本宗教学会第 74 回学術大会、創価大学、2015年9月5日

小川 有閑、信仰者の語る被災地の霊的体験 東京近郊の仏教者の事例から、日本宗教学会第 74 回学術大会、創価大学、2015年9月5日

堀江 宗正、信仰者の語る被災地の霊的体験 東京近郊の諸教団の事例から、日本宗教学会第 74 回学術大会、創価大学、2015年9月5日

堀江 宗正、Continuing bonds in the disaster area: Locating the destinations of spirits、XXI World Congress of the International Association for the History of Religions (IAHR)、2015年8月25日、アメリカ合衆国

高橋 原、Tales about ghosts of the tsunami dead and their reception in Japan's religious landscape、XXI World Congress of the International Association for the History of Religions (IAHR)、2015年8月25日、アメリカ合衆国

高橋 原、How Buddhist Monks Deal with So-called Occult Phenomena in Disaster Areas after 3.11: From the View Point of Grief Care. ICG2014: The 10th

International Conference on Grief and Bereavement in Contemporary Society, 2014年6月11日、香港

高橋 原、宗教者による心のケアと心霊現象 聴き取り調査から、日本宗教学会第73回学術大会、同志社大学、2014年9月13日

相澤 出、質問紙調査からうかがわれる被災地支援と宗教者の現況、日本宗教学会第73回学術大会、同志社大学、2014年9月13日

堀江 宗正、被災地における霊的体験と継続する絆 身内の霊と未知の霊、日本宗教学会第73回学術大会、同志社大学、2014年9月13日

鈴木 岩弓、震災被災地にみる死者と生者の接点、日本口承文芸学会第38回大会、東北大学、2014年6月7日

高橋 原、被災地における「心霊現象」と宗教者の対応、日本宗教学会第72回学術大会、國學院大学、2013年9月08日

高橋 原、被災地の幽霊と宗教者の役割、印度学宗教学会、駒沢女子大学、2013年6月11日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 原 (TAKAHASHI, Hara)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：30451777

(2) 研究分担者

鈴木 岩弓 (SUZUKI, Iwayumi)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50154521

木村 敏明 (KIMURA, Toshiaki)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：80322923

堀江 宗正 (HORIE, Norichika)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：90338575

相澤 出 (AIZAWA, Izuru)
医療法人社団爽秋会岡部医院研究所・調査研究部・研究員
研究者番号：40712229

(3) 連携研究者

谷山 洋三 (TANIYAMA, Yozo)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：10368376

(4) 研究協力者

小川 有閑 (OGAWA, Yukan)